

外山さんから山で「またぎ」と会った面白い話を聞きました。 それでそれをちょっと文章にしてくれ頼み、次のような文を送ってもらいました。今時、こんな「またぎ」がいるのかと日本の山の懐の深さを感じました。まあ、それにしてもこんな亭主や親を持った家族は災難かも知れませんが、本人は必然・自然で山の中で暮らしているのでしょう。

“またぎ”と山の中で出会った！

外山君江

8月初め、いつもの滝行の仲間と秋田県の太平山（標高 1,171m）に登りました。登りながら途中、いろいろな人達に出会いました。

御手洗という水場で昼食としてそうめんを茹でていたとき、突然、獣道から人が現れ、一瞬、熊が出てきたかとビックリ。よくよく見ると、道すがら二度も出会った男性（推定50代）とわかり、なんとなく親近感を覚えたので、仲間の人と一緒にその男性に声をかけました。

なんと、本物の“またぎ”だった！

3年前、秋田の森吉山に登ったときに、またぎの狩猟方法を学んでいたのも、興味をそそられ、いろいろ聞いてみました。

「禊ぎをして集団で猟をするんでしょう？」

「集団で（猟を）やる人たちと自分のように単独で行動するのと、他にもう一つの方法がありますが……。単独でやっているのは、私が最後です。単独でやっていた人たちは、もうみんな死んでしまいました」

さらに、印象深い言葉が続きました。

「私は獲物を狩るのに鉄砲は使わない。鉄砲を使うと（猟が）ゲーム感覚になってしまうから」

熊と一対一で対決するとも言い、食うか食われるかの命同士のぶつかり合いをしながら生きてきた人です。その人の語り口は穏やかそのもので、弓と槍で熊と対決するような激しさはみじんも感じられません。

そうめんを勧めたら、喜んで食べてくれました。

「こんな食事をしたのは久しぶりです」

普段、この人は森の中で捕れるものを食べているそうです

「家」はあつてないようなもので、ほとんど森の中で生活しているとも言っていました。鬱蒼と茂った森の中では迷うこともなく、一本一本の木が番地代わりと話してくれました。

「熊を仕留めたら引きずって帰るんですか？」

この問いかけには、すぐに燻製にするという返事。炭焼きもするので、山の中にいくつか小屋をもっているとも言話を続けました。

家族のことも聞いてみたところ、娘さんが小さいころは、一緒に山に来たけれども、今は東京のような都会にいるそうです。奥さんには逃げられた(?)のような口ぶりでした。

話の途中に、ちょっちょつと草を採ってきて、ハーブティを作ってくれました。それは朝鮮人参と同じくらいの効能があるとのこと、冷たくしたり、温かくして頂きました。

別れ際、そうめんのお礼に“あまちゃづる”をさし上げましょうと言うなり、森の中に消えていきました。わずか数分で戻ってきたら、“あまちゃづる”とそれによく似た“カラスウリ”との違いを教えてくださいました。

その人は山の中で生きるうえで、様々な知恵をもっているのでしょう。私の記憶では、あまちゃづるは漢方薬の中でも上薬に属しているはずです。

その人は私たちにあまちゃづるを手渡すと、再び獣道を通って森の中に戻っていきました。